百戦百勝

働き一両・考え五両

城山三郎

百戦百勝

城山三郎

角川文庫 4459

昭和五十四年十二月二十日　初版発行
昭和五十七年 四 月 十 日　八版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二——十三——三
電話東京二六五——七一一一(大代表)
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——千曲堂製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-131014-0946(0)

百戦百勝

働き一両・考え五両

城山三郎

角川文庫 4459

目次

序章　都心の妖怪　五
一　青い風の中で　一四
二　ネズミがだめなら　五七
三　浮き沈み　七六
四　寝耳に水　九二
五　妻をめとらば　一二五
六　暴力買い　一三三
七　金庫とヤカン　一六六
八　ある情報　一八六
九　本物とニセモノ　二〇七
一〇　うわさの男　二三五
一一　黒頭巾出現　二四二
一二　事件前後　二六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一三　不自由知らず　二九五
一四　食わんがため　三二三
一五　宝の山　三三〇
終章　花開く　三五六

解説　福田　淳　三七三

序章　都心の妖怪

七階建のビルの中は、がらんとしていた。

正月元日のことでもあり、日本橋のオフィス街に在るそのビルに、人気がないのは当然であった。一階の商店街はじめ、各階のどの会社も、二、三日前から休業。壁も床も冷えこんだ中に、わずかに保安灯だけがついて、幽霊の出る古城にでも迷いこんだ感じである。靴音だけが、高く壁にこだまを返した。

歩いているのは、角力取りのような大男であった。名は、春山豆二。下り目と下り眉、大きな福耳。頭は、八分通りはげている。

豆二は、勝手知った非常口から、そのビルの中へ入ってきた。豆二が訪ねようとするのは、ビルの所有主兼管理人兼掃除婦であるお安ばあさん。一階の歩道に面した花屋も経営している老女である。

もちろん、この日、花屋は閉店。非常口脇の小さな管理人室をのぞいたが、そこにもお安の姿はなかった。ただ、新聞や、わずかの年賀状、それに、ひとり占いのトランプなどが散らばったままで、遠出した様子ではない。

「お安のやつ、どこへ行ったんだ」

つぶやきながら、豆二は一階の廊下を歩いた。そして、エレベーター・ホールまできて、ぎくりとした。

二基のエレベーターの中、一基が動いていた。階数を示す数字に、６５４と、サインの灯が入って行く。

「来ている人間があるんだな」

すると、その声がきこえでもしたように、灯は、４５６７Ｒと上って行って止まった。

Ｒとは、屋上である。正月の寒空の下、屋上へ出るとは、よほど酔興か、気のおかしいやつと思ったが、そのとたん、Ｒの灯は、ウインクするように点滅したかと思うと、また下へ動きはじめた。

７６５４３

そこで止まると、くるりと尾をひるがえし、

３４５６７

無人同然のビル内のことである。各階の人々が上下しているわけではない。だれかが、エレベーターをいじっている。

７６５４３２

エレベーターは、また下りてきて、そこで再びはね上って行った。

２３４５６７

「ドレミファソ、ソファミレド」などと、ピアノのキイをいたずらしているような動きである。

豆二は、下っている眉をつり上げた。これが自分の会社なら、雷を落とすところである。

「だれだ、エレベーターであそんでいるのは」

吐き出すようにいったあと、豆二は、ぞっとした。

正月でビルは無人。オフィス街のことであり、外から子供などがしのびこむということもない。

とすると、まるでエレベーターが、生命を持って、自由に遊び出したかのようである。

豆二は、呼びボタンを強く押した。

５４３２１

エレベーターは静止し、えんじ色のドアが開いた。

瞬間、その中から、髪をふりみだした妖怪のようなものが、おどり出てきた。

「あっ！」豆二は思わず声を上げた。ついで、その妖怪の正体を見て、にが笑いとともに、

「なんじゃ、お安か」

「なんじゃとは、なんや」

お安は、欠けた乱杭歯を見せて、突っかかってきた。

「あんた、いい歳して、いったい何をやってるんだ」

「見たとおりや。エレベーターであそんでたんや」

灰色に汚れた髪をふるわせて、答える。いつものくたびれたヨウカン色の着物。すり減った下駄。

この老婆が、歯の欠けた口で笑いながら、だれも居ない近代的なビルの中で、たったひとり、エレベーターにのってあそんでいる——。

豆二は、声が出なかった。こっけいというより、鬼気迫る感じがした。

「……正月なのに、どこへも行かんのかい」

「行きゃ、金がかかるやないか。それに、テレビの公開番組見に行くんが、わてのただひとつのたのしみやが、どこも正月番組をみんな暮の中に録画してしまったさかい、どこへ行っても、正月中はひとつも公開番組見られへん。出かける先がないわ」

「……」

「それに、あんたかて、わてがここからどこへも出かけんの知って、訪ねてきたんやろ」

「そりゃそうだが、しかし、まさか、エレベーターで……」

「指先ひとつで、こんな大きな鉄の箱がおとなしゅう動くんや。運転いうんは、たのしいもんや」

ボタンを押すだけのことで、運転というほど大げさなものではない。

だが、お安は、歯の欠けた口をあけ、いかにもたのしそうにいった。

「ふだん、わてがのると、汚ないばばあ、どこから来よったと、サラリーマンたちににらまれ

るよってな。わてがこのビルの持主いうことも知らんで。けど、ビルの評判落とすと、わての損になるさかい、辛抱しとったんや」

お安は、そういってから、豆二に向かい、

「どや、いっしょにのらへんか。わてとアベックも、わるうないで」

かすれた声で笑った。

豆二は、気が進まなかった。たとえ用があるといえ、正月早々、こんな妖怪のような老婆と、密室にとじこめられたくはない。

だが、大男のくせに、まるで目に見えぬクモの糸にからめとられるように、豆二はエレベーターの中へつれこまれた。

「さあ、わてらアベックだけや」

お安は、幾重もの皺の中の目を細め、筋ばった指で、ぽんと「7」を押した。

エレベーターは、軽快に上昇しはじめた。お安は、豆二の腹あたりに、そのみだれた髪を寄せてきた。

「久しぶりに二人だけや。何とのう、変な気になるやないの」

変な気どころか、豆二としては、身ぶるいしたいほどである。

それに、お安ひとり長時間こもっていたせいか、エレベーターの中には、すえた体臭のようなものがこもっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「何か、におうな」
「それは、金のにおいや」
「……」
「わてら、金持二人がのってる。金のにおいが溢れ返っとるんや」
流し目で見上げながら、お安は、また顔を近づけてきた。
豆二は払いのけるように、
「それにしたって、エレベーターを動かしゃ、電気代がかかるじゃないか。わしの会社で計算させたところでは、たしかエレベーターが一回止まるたびに、十六円とか、かかるはずだった」
お安は、低い鼻の先で笑った。
「心配要らへん。エレベーターの電気代は、このビルに入っとる会社へ割りふるだけや。わては一文も払わんでええ。乗り放題や」
エレベーターは七階に止まり、ドアが開きかかった。とたんに、お安は指をはずませ、「2」を突いた。
ドアは閉まり、エレベーターは地底へ吸いこまれるように下りはじめる。指示盤の灯が、6 5 4と走って行く。ただそれだけのことである。景色が見えるわけでも、スピードが変わるわけでもなく、少しもおもしろくない。これをひとりでくり返してたのしんで居るというのは、やはり、精神異常か、一種の妖怪である。

灰色のざんばら髪、こけた頬、歯の欠けた口、ヨウカン色の着物、ちびた下駄――見れば見るほど、妖怪に近い。女ながらに、東京という大都会の血を吸って生きている妖怪。

エレベーターが二階で止まると、その妖怪の骨と皮ばかりの指が、すかさず、今度は、「R」を押した。エレベーターは、屋上に向かって上昇に転じた。

豆二は、落ちつかなくなった。こんなことをしている中、もし、停電なり故障でもしたら。

正月のビルのエレベーターの中で、老人の男女二人があそんでいようとは、だれも考えまい。気づかれぬまま、仕事はじめの五日か六日まで閉じこめられ、そのあげく、化物でも発見したような大さわぎになる――。

豆二は、早く下りたくなった。

ただ、お安の上きげんの中に、わざわざやってきた用件を切り出しておく必要がある。

「今度、うちの会社でも投資信託をはじめる。ハルマメ・オープンという名でな。そこで、あんたに一千万でも二千万でも、応援してもらおうと思って」

お安は、急に、しゃんとした声になった。

「一千万、オープン投資信託を買えというんか」

「あんたの財産の一パーセントにもならんだろう」

「何いうてんや。あんたの財産こそ何百億。一桁ちがい。ほんま、桁ちがいや」

「それにしても、お互い、一代でようもうけたものだ」

大男の豆二と、小女のお安が、エレベーターの中で顔を見合わせた。しげしげと、相手を見つめる。

米問屋の倉庫に寝起きしていた小僧と、安食堂で働いていたまだ初々しいお下げ髪の少女の五十年後の姿——。少しばかり劇的で、胸がつまりそうになるところだが、お安は、すぐまた鰹だらけの顔をしかめた。

「わてはエレベーターであそんどる。それなのに、正月早々、大社長のあんたは、商売にくる。桁ちがいになるはずや」

エレベーターは、七階に着いた。

「けど、投資信託の設定なんて、大仕事やな。四大証券の後追ってやるんや。よほど、新聞やテレビで大宣伝せんと、客は集まらへんで」

ドアが開き切る前に、お安の指は、「3」を突いた。一階へ下りるつもりはないらしい。

「おい、たのむ、もう下してくれ。目が回る」

豆二は悲鳴を上げた。

「乗物好きやいうに、あかんな」

「……茶でも出してくれ」

「よしゃ」

だが、エレベーターを下り、管理人室へ行って出されたのは、コップに汲んだ水であった。馴

れているので、豆二はおどろきはしない。
「正月早々、ひとの寿命や災難を占うのも、ええもんや」
お安は、散らばっていたトランプをかたづけはじめた。エレベーターあそびの前は、ひとり占いをたのしんでいたらしい。
かたづけたトランプを、お安は小さな神棚に上げ、手をたたいた。灯明が、消えかかっている。
四畳半ほどのせまい部屋、くたびれた着物。それだけ見ていると、お安の生活は、もう何十年もの間、少しも変わっていないかのようである。
「冬子さん、元気かい」
お安は、豆二の妻の名を気軽に呼んだ。豆二がうなずくと、
「当分、死にそうにないな」
「……うん」
「インテリのくせして、ええ奥さんや」
ほめたあと、すぐ続けて心外そうに、
「ええひとほど、早う死ぬというのになあ」
湯のみについだ水を一口のみ、
「あかんなあ。占いによると、あと十年は生きそうや」
ちょっと声を落としたと思うと、すぐまた元気よく、

「けど、わては、もっと長生きするで。ひょっとすると、百五十まで生きるわ」
お安は、思い出したように、また腰を上げ、神棚からトランプを下した。カードの四隅は、すりきれて、まるみを帯びている。
お安は、針金細工のような指で、カードを切り出した。うす笑いを浮かべながら。
「ひとりで他人のことを占っているのか、気味のわるい女だな」
「これも、金は要らへんしな」
お安は、そういってから、豆二に向き直り、
「ところで、あんた、ごく近い中、ふるえ上るようなことがあるで」
「えっ、そんなバカな。おれはもう大きな相場をはっとるわけでない。それに、今度のハルマメ・オープンが仮にうまく行かなくたって、別に損するというわけでもないしな。ふるえ上るような心当りはないわ」
だが、お安は、断乎とした口調でいった。
「何のことかは知らんよ。けど、あんたは、ふるえ上るんや」
「おかしいな」
「ほんま、おかしいよ」
「……」
「いえ、わてがおかしいいうのは、そのふるえ上ったあと、最後は吉と出とることや」

残念そうに口をすぼめていう。
「吉なら結構だ。ふるえ上ることもないだろう」
「いや、ふるえ上る。それは、はっきり出とるんや」
お安は強調した。豆二は、ふきげんになった。
「正月早々、縁起でもない」
「大男が何やね。顔色わるうして」
黙りこむ豆二に、お安は叱るようにして、つけ加えた。
「あんた、これまで何べん何十べん、ふるえ上ってきた？　それ思えば、あと一べんや二べん、何やね」

お安の不吉な予言が適中したのは、それから三日後の深夜のことであった。
事件は、麻布三河台に在る広壮な春山豆二の邸の中で起った。
時刻は、午前一時を少しすぎたところ。豆二、冬子の夫婦は、床の間に川合玉堂の絵のある十畳の寝室で、床を並べて休んでいた。
あやしい物音に、冬子がまず目をさました。その時刻にだれも歩くはずのない廊下を、足音が近づいてくる。それも、「抜き足差し足忍び足」という表現がぴったりの歩き方である。
足音は、夫婦の寝室の前まできて、とまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com